



## ファイルメーカー Pro を利用した蔵書管理

藤本 敦子

### I. はじめに

当院図書室では、1995年より単行書・製本雑誌をコンピュータで管理することになりました。最近ではさまざまな図書管理ソフトが販売されていますが、蔵書数や利用者数の少ない当室には馴染むソフトもなく、その上、コスト面においても導入するには無理がありました。そのため、やむなく、蔵書データの蓄積を目的とした独自のコンピュータ管理を行うことにしました。そこで蔵書管理について、当室（小規模な図書室）の悪戦苦闘ぶりをご紹介させていただきます。

### II. 当室の蔵書管理

現在、管理業務で使用しているソフトは、ファイルメーカー Pro 6.0 (Windows and Mac) です。このソフトは、管理業務だけでなく相互貸借業務等にも利用し、大変重宝しています。しかし、まだまだ使いこなせていないのが現状で、見た目にも貧弱な管理方法ですが、簡単にご説明いたします。

まず、管理上必要な書誌データ（書名・著者名・出版社・分類番号.etc）のフィールドを定義し、データベースの土台を作ります（図1）。

次に、業務上必要な項目をレイアウト設定し（図2）、それぞれに必要なフィールドを組み合わせ、データベースファイルを作成します。また、基本データ（全書誌データ）の準備さえし

ておけば、自由自在にレイアウトができ、必要に応じたデータベースファイルをいくつでも作成することができます。その上、検索やソートも可能なので大変便利です。では、実際に活用しているレイアウトについてご紹介いたします。



図1. フィールド定義

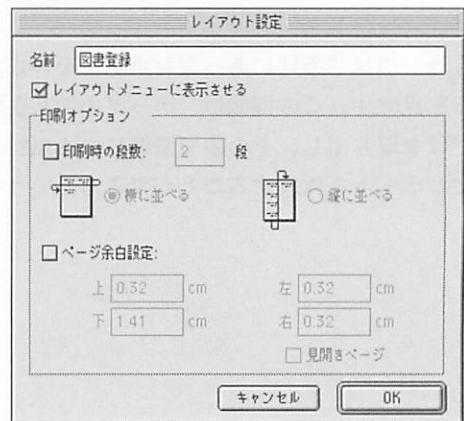


図2. レイアウト設定

1. 図書登録 (基本データの入力)

基本データベースとなる「図書登録」については図3のように、書誌データを全て表示させます。

2. 受入登録印

コンピュータ管理以前は、図4のような受入登録印を表紙の裏に押印し、その上から受入番号(登録番号)をナンバーリングで押印していましたが、現在は、タックシールに受入登録印(図4)をプリントし、表紙の裏に貼付しています。この場合、はがれる恐れがありますので、小口印及び隠し印が必要です。また、受入登録

印には書名を表示する必要はないのですが、タックシール貼付の際、図書と照合するために、あえて挿入しました。このような融通性・独自性があるのも手作りならではでないでしょうか。

3. ブックラベル

単行書の受入が少ない当室では、当初、図5のようなブックラベルをレイアウトし、無地のタックシールにプリントして使っていました。しかし、使用したタックシールが耐久性に欠けていたことと、今後、単行書の受入が増加した場合のことなどを考えるとあまり能率的・効率

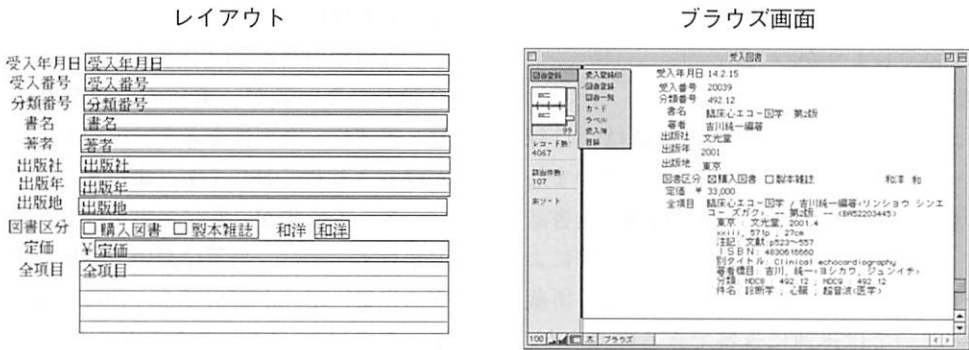


図3. 図書目録 (レイアウトとブラウザ画面)

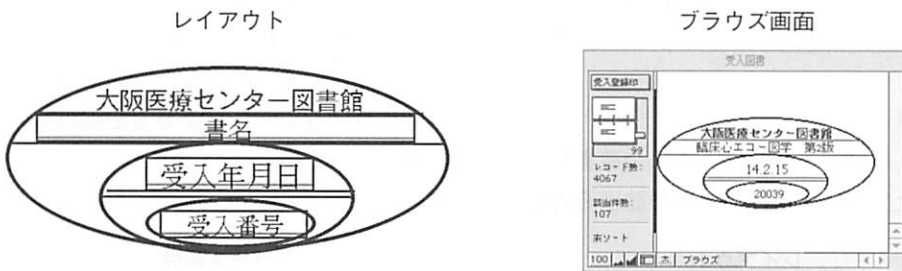


図4. 受入登録印 (レイアウトとブラウザ画面)

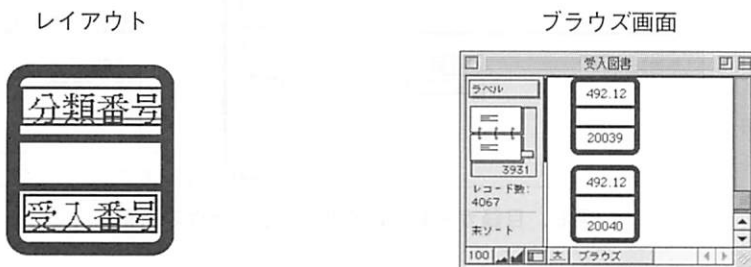


図5. ブックラベル (レイアウトとブラウザ画面)

的作業とはいえません。したがって今では、市販の三段式ロールラベルを使用し、上段に分類番号、下段に受入番号が出力できるようにだけレイアウトしています。

#### 4. 図書原簿・蔵書目録・目録カード

現在は、手にすることもなくなりました図書原簿・蔵書目録・目録カード(図6)も、印刷物として必要な時に提示できるよう、従来通りの形式でレイアウトしています。しかし、最近では、「平成15年度購入図書一覧」「洋書一覧」「分類順図書一覧」等、多様な形式が求められますので、要望に応じたレイアウトを設定し、データの抽出を行っています。こうした細やかなサービスも小規模な図書室だからこそできる技ではないでしょうか。

#### 5. 蔵書検索

コンピュータ管理以前の蔵書確認は、目録カード・蔵書目録・図書原簿等に頼っていましたが、現在は「図書登録」の全項目欄(全書誌データ)より書名・著者名・キーワード等による蔵書検索を行っています。このように、所蔵の有無においては迅速に返答できるのですが、利用者からは特定な図書よりも内容についての問い合わせが多いので、今後単行書においては、contents 検索ができるようにもしたいと考えています。

#### 6. 統計処理

検索条件を入力することにより、全蔵書数・年度別蔵書数及び、単行書・製本雑誌別蔵書数

や和洋別蔵書数など、蔵書に関するさまざまな数値が即座に抽出できます。また、貸出者数や貸出冊数を抽出するために、相互借借業務用で作成した職員氏名ファイルデータを利用し、貸出・返却・督促業務も行う予定でした。しかし、現在の当システムからでは、単行書と製本雑誌に限定されることと、1日あたりの貸出冊数がわずかなことから、作業の効率化を考えると今のところ利用するには至っておりません。今後は、この業務を取り入れ、貸出者数や貸出冊数・種類別貸出冊数などが抽出できればとも考えています。

### Ⅲ. おわりに

一人職場のうえ、コンピュータに関する知識や能力のない者が、業務の合間をぬって便利性・迅速性・合理性を考え、模索しつづけ9年が経とうとしております。まだまだ改良点の多いシステムですが、常に蔵書データの蓄積・検索が行え、また、当室において主要な業務(効率的作業)だけが選択でき、独自に改良もできますので、今では不可欠な存在となっています。今後、全ての図書室業務を網羅し IT 時代にふさわしいシステムとなるためには、更なる蔵書の充実や利用者数の増加に力を注ぎ、また、自らコンピュータに関心を持ち、知識や能力を養い身につけるよう、日々努力を重ねていきたいと思っています。

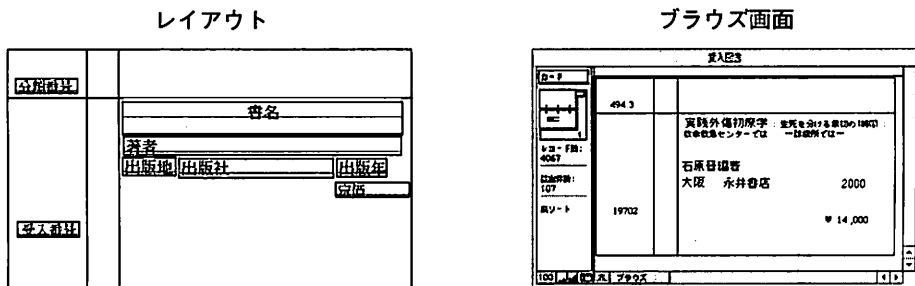


図6. 目録カード(レイアウトとブラウザ画面)